

教化の強化

—第11回中央教研報告を中心に—

下から横へ—教化研究の輪をひろげよう

当面する教化研究活動の三つの柱は、次の点にある。

- (1) 10 宗務区で教化研究会議を開催し、いつそこの充実を図り教化交流の輪をひろげ教化活動をつみ重ねていこう。

- (2) 74 管区に教化センターを設置し、地域に適應した教化内容と資料教材を作成活用していこう。

- (3) 教化活動に取り組む教師中心の伝道宗門づくりをめざし、教師一人ひとりが立上り協力しあっていこう。

この△三つの柱√は、日蓮聖人七〇〇遠忌を目標とする報恩教化活動の重点であり、しかも報恩教化を土台に七〇一遠忌以後の教化活動の方向を提示するものである。これ

は、日蓮聖人の教えと生き方に導かれつつ、現代社会において日蓮宗は何をアピールし、いかなる指針を提唱・実践すべきなのか、という命題にこたえていくために、何よりもまず日蓮宗を担っていくべき教師が教化研究活動への態勢を形づくっていかうとする座標軸をも意味している。

いうまでもなく教化活動の基本目標は、法華経と日蓮聖人の教えをひろめ、その信仰と教えのもとに現代に生きる人々を結集し、化導していく所にある。教化とは、自己の精神的変華であり信仰への帰入と弘道である。それは、教師自らがまず法華経と日蓮聖人の教えによって教化されることからじまる。寺院間・教師間の教化交流と協力、個人的・分散的布教から集团的・組織的教化への脱皮、人々の苦悩に共感同苦しつつ教化に励む教師の姿勢、日常的教

化体験や情報の交歓と活動のつみ重ね、教材資料の協同作成などは、教師中心による教化本位の日蓮宗づくりを具現していく第一歩の作業である。

この作業は、第一に現場の教師による下からの声や多様な経験・認識に依拠しなければならぬ。下からの総意にさええられながら教化交流の内実を豊かにし、問題点を見直し解決の道を探求することが不可欠である。教化活動は、上意下達の一方通行によってではけつして促進することはできない。第二に、下からの声を横へ横へ、とひろげ教化交流の輪を地域的にさらに全国的へと転法輪させねばならない。教化の担い手は教師一人ひとりである。この教師間の教化に対する連帯すなわち八水魚の思いである。その教師が自らの特性や体験を活かし、また地域の特色をつかみつつ適合した教化方策をうち立てていくために力と心をおわせていく八異体同心の路線を名実共につくりだしていくことは、きわめて重要である。特技のある者は特技を、智慧のある者は智慧を、力のある者は力を、実務のできる者は実務を、金のある者は資金を、関心のあるテーマは研究へ、教化の体験・資料は交流を、そうした協同した教化実践のつみ重ねなくして教化活動の開拓もありえない。行政主導ではなく宗教の外護を背景にした教師による自由・自主・自治的な企画・運営・推進にもとづく教化本位の伝道宗門態勢はこうした八下からの動きを横へひろげる八

化の「研究と実践」を土台として確固なものになっていくであろう。そして、これらの目標を点検し具体化していく場こそ、教化研究会議（教研会議）にほかならない。教研会議における次のごとき性格づけは、右の内容を端的に表現するものである。

「教化研究会議とは——一、布教教化について教師がおたがいに交流し討議しあい、学びあう場です。一、当面しているさまざまな問題をとりあげ、現代に対応する教化のあり方を研究しあう場です。一、教化上の悩みや問題点をさぐり、それをどのように打開したらよいかをみんなで考え話しあう場です。一、伝道宗門の確立をめざし、教師の意見や要望を宗門に反映させる場です。一、年齢・性別・役職などの別なく、みんな平等の資格で自由に意見をのべあえる場です。」

研究と対話から実動へ

教研会議は、昭和五三年度現在で中央において一回、地域において八宗務区、三一回にわたって開催されてきた。地域教研の内訳は、北海道2、東北3、関東5、京浜4、山静3、中部3、近畿8、中四国3回である。各地とも平均参加人員は約八〇名であり、延べ人数はおよそ二五〇〇名が出席したことになる（個人別では七〇〇〜八〇〇名と思われる）。まだ開催していない九州・北陸でも、五

四年度には開くことが決定もしくは開催の意向にもとづいて話しあわれており、十宗務区開催の目標は達成されようとしている。

こうした宗務区教研は、宗務院・宗務所の支援をうけつつ現教研・中央教研運営委員会および地域運営委員会によって企画・運営されてきたものであり、今後はこれを基礎にして△管区教研▽や県単位の教研が自主的に開かれていくことが大切であり、そうすれば教研活動のすそ野はさらに拡大されていくであろう。教研会議が全国の小地域で開かれるだけでなく、教師が参加しようと思えば参加しえる機会を増大させることができるし、その地域の個別特殊の問題が討議され、その内容を他地域にも伝えたり、全国的な教化活動と結合しながら地域の問題を考えていく横のひろがりを持つことが可能になっていくにちがいない。

このことは、今までの教研会議において、教化体験や事例・問題点がじつに多様に提示され、種々な困難にぶつかりながら、打開の道を模索している実状も明らかにされてきたことによっても証明されよう。開拓伝道(北海道)、過疎寺院の後継者問題(東北)、檀権(関東)、寺院経営と教化のあり方(京浜)、行事風習の意義づけ(子弟教育(山静)、教師の自覚(中部)、報恩教化と教化センター、地域宗門史の見直し(近畿)、教義の現代化(中四国)などが、教化活動を前述させ現状を打開していくために取組むべき課題とし

て提起され検討されたものの一端である。これらは、個人の力によるだけでなく、教師間や宗務所などの地域機関が宗門全体でうけとめねばならない問題でもあり、「個人プレーより集団的・協同的教化へ」をめざす実働体制の確立によって、打開し具体化せねばならないという方向づけが示されました。教化研究に教師が参画し教化交流を深めてきたことは、教研会議における第一の成果であった。

地域教研会議の成果や問題点を、地域の運営委員会がとりまとめを中央教研に反映させること、中央教研で検討され提示された教化方向を、地域運営委員がうけとめて地域教研において地域の状況にもとづき具体化していくこと、この相互関連による教化研究もまた地域と地域との横のつながりを強化していく方向であり、第十一回教研はその第一歩をしるすものであった。

第二の成果は、教化内容と方策を再点検し現代に適応する多様で自覚的な教化活動の方向を追求したことである。これは、次の側面におけられる。

(1) 教学を教化に活かす研究。教化の理念とその具現をめざし、現代の伝道における立正安国の意義、報恩の精神、日蓮聖人と公害問題、法華経と教化などを明らかにしてきた。

(2) 布教対象に対応した教化内容と教育の研究。檀信徒、未信徒教化および少年少女、青年、青年、老年、婦人別の

教化方法や教化計画、寺院子弟の教育、信徒の育成、信行会など教化、教育の場の活用方法、人材養成の推進などを検討しカリキュラム化が図られた。

(3) 現代社会の実状と教化の関連についての研究。都市および農村における伝道、都市化と寺院経営、公害など社会的現実に対する教化対策などをとりあげてきた。

(4) 社会・宗門・寺院等の場における多様な教化活動の研究。現代社会の把握、現代の動きと寺檀関係の変容、伝道宗門のあり方や伝道の場としての寺院の活用など。また教化の多様な方法についても、行法・文書・視聴覚、個人と集団教化などの事例研究が行われた。

(5) 教化の協同化・組織化についての教師の役割と実動に関する研究。教研会議の充実と拡大、運営委員会の設置と実動、教化センターづくりの推進、教化情報、教材資料の収集・作成・配布など多面的な役割、教師間の協力体制と組織的実動の重要性を明らかにした。

教化研究における△弘法の用心▽とは、①教学(教)の具現、②教育(機)の推進、③教化の現代化(時)、④教団の社会的展開と教化本位の態勢づくり(国)、⑤教師を担い手とする教化実践(序―師)となるであろう。

第三は、教研会議の内容が、教務部を中心に宗務当局によって受けとめられ、要望が反映されてきたことである。教化カリキュラム作成委員会の設置と実動、「信行道場説

本」の刊行「報恩のすすめ」の刊行、教研会議の拡充はもとより会議および教化センターの予算措置、教研運営委員の設置、青少年教化対策、七〇〇遠忌布教方針の内容。「恩の構造」「教研と教化センターのしおり」の全ヶ寺配布などはその代表的なものである。

第四は、七〇〇遠忌を当面の目標とする△報恩教化▽を提示してきたことがあげられる。教研会議では、いち早く「報恩のための教化活動」の内容を検討し、日蓮聖人の報恩の教え、恩の歴史的なうけとめ方とそのあやまち、日蓮聖人の報恩観にもとづく現代における報恩実践の内容と方法およびその生活化を話しあった。さらに、「恩の構造」(「現代宗教研究」所収)を中心に、教研会議や遠忌特派布教等の場でも討議され、その内容が遠忌をめざす基本とされつつ活用されてきた。これは、「恩の構造」の全ヶ寺配布とあいまって、教務部・現宗研・教研参加者の三者一体となり、七〇〇遠忌△報恩教化▽への理念と姿勢と内容を弘めたことを意味するものである。

第五には、教化の組織的実動体制づくりのカナメとして△教化センター▽の設置と実動をめざしてきたことである。教化の協同作業については、地方宗門史のまとめと発表、「報恩の説き方」「お会式資料」などの作成や多種多様な寺報、教箋類などの資料交換、配布がなされ、また教化交流誌「教化の友」も発刊され好評をえてきた。近畿宗務

区教化センターと東京西部教化センター(管区)がつくられ実績をあげている。教化の情報、資料、相談、研修交流などを返して、すべての教師が協力しあっていく機関ができれば、有効でキメ細い教化活動はさらに前進するであろう(くわしくは「教化研究会議と教化センターのしおり」参照)。さらに、教化活動の分野別とりくみを持続的に展開するために、教師各自がそれぞれの特技や関心・体験をつねにだしあつていく(分野別担当体制)の強化も急務の一つとなっている。

教研会議は反面では、なお多くの不充分さや課題をかかえている。今なお全教師の中に知られていないとはいえず、定着しているともいえない。教師間の協力体制もその一歩を踏みだしたにすぎない。教研会議も形式的な開き方におち入る危険性をいつも警戒せねばならない。対話から実動化への道を模索しつつある等々、決意をあらにし(志)を高めて教化の「研究と実践」を凶らねばならない。(報恩教化)の内容をもう一段深め、七〇〇遠忌と七〇一遠忌以降の教化体制づくりを強化すべきである。昭和五四年度には、第十二回中央教研「身延教師結集」が開催される。身延から池上へ、池上から全国へ、地域へ、(教化)の旗をかかげながら「研究と実践」への道を不断に開拓していかねばならない。

第十一回中央教研は、この姿勢にもとずき十年間の教研

会議の歩みに立ち、遠忌報恩へのあらたなる実動をめざし、しかも地域教研のひろがりやを土台にして、中央、地域運営委員の総意を反映・交流・結集するものとして開催された。その要旨(日蓮宗新聞掲載)は次の通りである。

十年の反省から前進へ

第十一回中央教化研究会議は、九月六、七日の二日間、全国から七十人が参加して、①七百遠忌へのあり方、②教化活動の組織化などを中心に、池上本門寺朗峰会館で行なわれた。今回はとくに十年にわたる歴史と、地域教化研究会議の定着という現状をふまえ、これまでのあり方を脱皮し、前進する意味で、参加者が有志から中央・地方教化研究会議の運営委員に選ばれたことが、大きな特色としてあげられる。

会議は統一テーマ「七百遠忌報恩の教化活動を推進し、遠忌以降における教化活動の組織的実動体制づくりをめざす」のもと、①十年の反省と遠忌報恩を目標とした教化研究会議のあり方、②地域寺院の実態と教化活動の交流、③教師間の連帯と教化の組織化、④分科会により各分野別の教化内容を検討する——などを目玉に、話しあいが行なわれた。

本門寺大堂での開会式について、朗峰会館で本会議を開会。まず中濃教篤現代宗教研究所長が「教化研究会議の歩

みと展望」を基調報告。これに基づいてA班（北海道・東北・関東・京浜）、B班（山静・中部・北陸）、C班（近畿・中四国・九州）の三班に分かれ、①教研会議の歩みと反省②地域の教化活動の組織化、③教化センターの設置と実践の具体化——など、活発な意見交換が行なわれた。歩みと反省では、①中央教研が未端に浸透していない、②PR不足があり、参加者が管区でまとめ報告をしておりあがる——などが意見としてまとめられた。

組織化では地方教化センター設置に論議が集中した。①既存の組織の上にもうひとつ組織をつくることになって屋上屋にならぬか、②独自の活動をめざすには、宗務所の傘下では自由な活動はのぞめない、③センターは宗門マンネリ化の突破口として実現すべきだ——などの意見があった。具体策として地域それぞれの事情を考慮して、地区に帰り実現に努力することとなった。

また中央教化センターについては、名称はともかくとして、宗務院内にすぐにも資料センターを作ってほしい。現宗研は積極的に資料収集に努め、あらゆる形で情報を流してほしいとの要望もあった。

このあと夜は七時から八時までと、翌日二日目の午前九時から正午までは、①年齢別教化、②文書活動、③寺院護持と地域教化——の三つの分科会を設け、ここでも熱心な討議が行なわれた。

第一分科会（年齢別教化）

七百遠忌の主テーマである「報恩」の教化にあたっては、青少年、壮年、婦人などの世代層に応じた説きかたをする必要がある。青少年教化では、①生涯教育をめざす、②法を説くよりも人を作る教化を、③青少年の自主性を尊重した教化を、④海水浴、ピクニックなど、肌ふれつつある教化に効果がみられる——など、まとめられた。

婦人層に対しては、①悩みごとの相談や歌、踊りなど趣味と実益をかねたものを通して宗教心を養う、②法華経を多角的に具体例をひいてとりあげ、質疑応答形式で説いていくと効果がある。老年層に対しては、①病気に関する正しい知識、はり、きゅうなどを通して教化のアプローチを②地獄、極楽などを現代的に話す——などがポイントとしてまとめられた。

第二分科会（文書活動）

文書の対象について、①未信の者へは提示板で、②檀信徒むけには教箋を。また教箋や掲示板に絵を書いて好評を得たことなども紹介された。

第三分科会（寺院護持と地域教化）

まず寺院護持の経験交流が行なわれ、この中で、①都市と農村の隔差と檀信徒の教化、②後継者養成と世襲制——

などの問題が討議された。

ここでは、法語や説教の場が少なくなってきたという反面、ハガキ伝道などの文書布教がのびている。布教師会などで統一的なものをつくり、それを配布して好評をえているなど、教化の組織化の一面が紹介された。この組織布教の面では、長野県で十カ寺の組寺組織を作り、教化や相互扶助を行なっているとの発表もあった。

最後に閉会式で中濃所長は「教化センターの必要性がいままで以上に理解されたことは、大きな前進である。来年はいよいよ身延結集大会となる。ぜひ成功させたい」と成果をまとめて述べた。